はじめに

100年先のまちのあるべき風景づくり

昭和40年代に始まった八幡堀の修景保存運動の目的は、八幡堀とともに引き継がれてきた歴史・伝統文化の継承と、アイデンティティの源泉づくりでありました。

もし、八幡堀が埋められていたら今日、どのようなまちになっていたかを考えるとき、時代時代のまちづくりの中で、流行に流されることなく、50年、100年先のまちのあるべき姿を見据えたまちづくりが如何に重要であるかを考えさせられます。

石垣と水路と湧水のある風景

西の湖と安土山に挟まれた安土のまち。豊かな自然に恵まれたこの地域では、西の湖に繋がる水路が入り組んだ水郷地帯に港や城下町などが造られました。佐々木六角氏や織田信長をはじめ先人たちが残していった輝かしい足跡の数々が、歴史資産として日々の生活の中に息づいています。

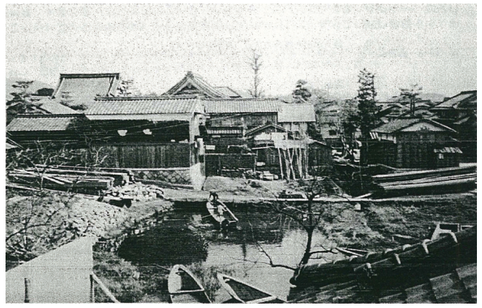
各時代を通じて近年まで生活に欠かせないものとして使われてきた水路や湧水、水路を囲む石垣は、地域の貴重な生活遺産でもあります。

このような歴史と自然の調和のとれた風景は、安土城の築城以前から近現代に至る人々の生活や生業の中で育まれ、継承されてきたものです。

市民一人ひとりの熱い思いが主体

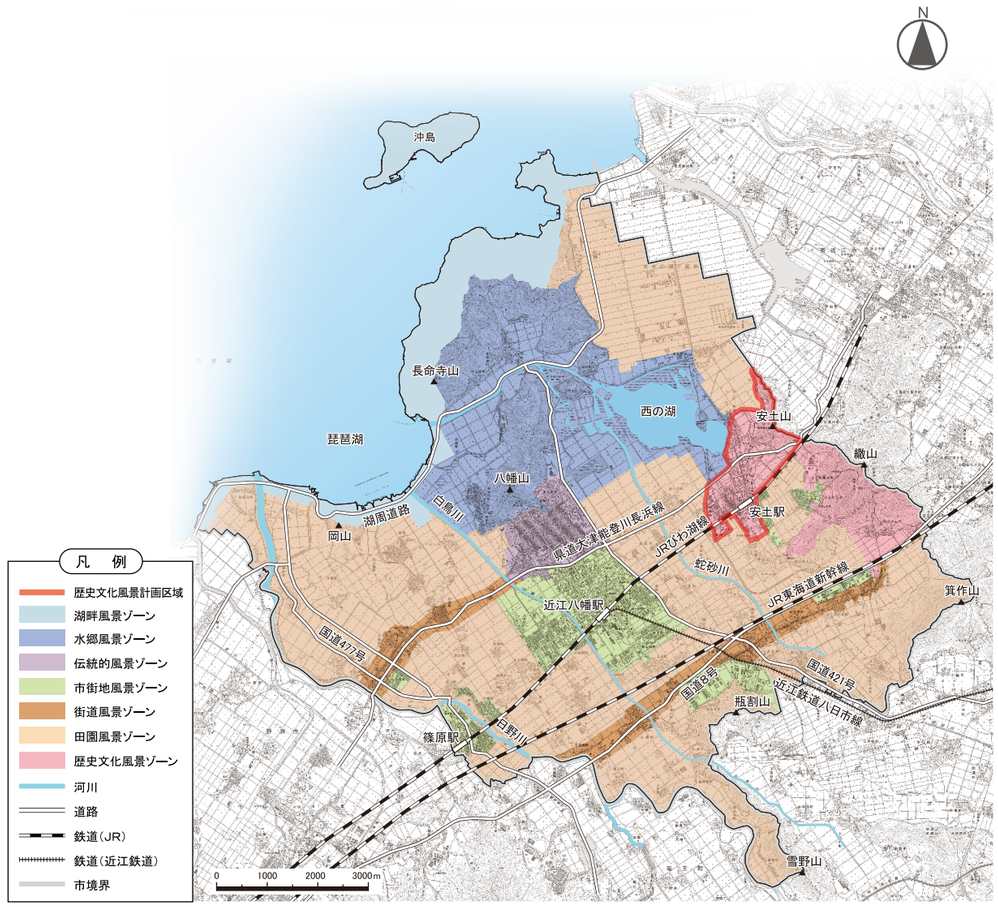
このようなことから、本市の風景への取り組みは、単にまちの外観をよくする事業ではなく、自然や伝統文化の継承を本質的な目的としなければならないことがわかります。
そして、その取り組みは、地域の個性を活かし、地域の魅力と価値を高めることであり、その活動自体が地域への限りない愛着と誇りを生み出すことにつながります。

風景づくりは、市民のみなさんの熱い思いが主体であります。市民のみなさんが共に考え、素晴らしい風景を守り、はぐくみ、次世代へつなげていきましょう。



埋め立て前の的場浜

繖山より安土山下町をのぞむ



近江八幡を構成する風景ゾーン